

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370195

研究課題名(和文) ロペ・デ・ルエダからセルバンテスへ 16世紀スペインにおける道化芸の系譜

研究課題名(英文) the performance by a clown in the 16 century of the Spanish drama

研究代表者

田尻 陽一 (Tajiri, Yoichi)

関西外国語大学・外国語学部・名誉教授

研究者番号：30081095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：役者が発したことばはセリフとして戯曲に残るが、道化芸は戯曲に書かれないので記録としては残らない。しかし、笑いを取ろうとする道化のセリフから、道化芸を抽出することができる。そこで、まずロペ・デ・ルエダが残した4つのコメディアと7つの笑劇から、道化芸をパターン化することにした。パターン化された道化芸を次の世代にあたるセルバンテスの戯曲に当てはめていくと、8編のコメディアでは笑いの演劇的機能が薄れ、笑いを取るためにだけ書かれた8編の幕間劇にのみ道化芸が残っていることが分かった。このことにより劇団内における道化役者の地位が低下し、セリフ劇として17世紀にスペイン演劇が成立したことが分かる。

研究成果の概要(英文)：The words which are talked by an actor remain in a play script, but the action which are acted by a clown and induces laugh doesn't remain there, that is, the performance by a clown is not left as both a record and a script. However by analyzing the words which the clown tries to win laughter of audience, we can infer clown's acting. Therefore it's possible to classify the clown's performance from words which trigger laughter in the argument. Classifying a clown performance in 4 comedias and 7 pasos(farces) of Lope de Rueda, the analysis stated above was applied to 8 comedias and 8 entremeses(farces) of Cervantes, who belongs to the next generation. By this analysis we can find that the theatrical function of the laugh had faded in comedies, and that a clown performance was left only in 8 farces, which were written only to win laughter. Therefore the status of the farceur in the theatre company became lower. This caused a Spanish drama as a play of words in the 17th century.

研究分野：人文学

キーワード：道化 セルバンテス ロペ・デ・ルエダ 大道芸 笑劇

1. 研究開始当初の背景

(1) ロペ・デ・ルエダ(1505?-1565)はスペイン演劇における最初の職業演劇人といわれているが、彼の道化芸を分析した研究書はスペインでも見当たらない。演劇史はしばしば戯曲と劇団活動から研究されるが、演技の歴史として研究されることはない。問題は最初の職業演劇人という言葉の定義である。中世から街角や広場では大道芸人たちが日々の生活の糧を稼いでいた。彼らも職業演劇人といえるであろう。

(2) アグスティン・デ・ロハス(1572-1635)は『愉快な旅路(1603)』で大道芸の劇団(旅行の一座)の種類を構成員の人数によって次の8つに分類している。

Bululú-----役者は1人

Ñaque-----役者は2人

Gangarilla---3人か4人の役者と女役をする少年1人。

Cambaleo---5人の役者に女優が1人。彼女は歌を歌う。

Garnacha---5人の役者に女優が1人。少年1人。少年は脇役の女役。

Bojiganga---6人か7人の役者、女優が2人、少年が1人。

Farándula---8人か10人の役者。女優が3人。8編から10編のコメディアを上演することができる。

Compañía---総勢16人ほど。50編のコメディアを上演することができる。

ロペ・デ・ルエダの戯曲を調べていくと、一人二役をすれば、だいたい8人で上演できる。彼の一座は Farándula と呼ばれる規模であったことが分かる。

(3) しかし、一座の規模によって8つに分類されるということは、ロペ・デ・ルエダ以外にも芝居の世界に身を投じていた役者たちは大勢いたはずで、ロペ・デ・ルエダだけをスペイン演劇の父と呼ぶ理由にはならない。

(4) 次に戯曲史から見てみよう。ロペ・デ・ルエダより以前にスペイン演劇史に戯曲を残している人たちは Juan del Encina (1468?-1529)、Lucas Fernández (1474-1542)、Gil Vicente(1465?-1536?)、Bartolomé de Torres Naharro(1485-1530?)、Diego Sánchez de Badajoz(?-1549?)などを列挙することができる。しかし、彼らの本職は学者であったり聖職者であって、自作を上演するにあたってアマチュアの私的な演劇活動であり、興行という概念はない。彼らの上演目的はイタリアのルネサンス劇の紹介であった。確かにロペ・デ・ルエダの戯曲はすべてイタリア物の翻案であるが、Juan del Encinaたちと違うところは、彼は演劇活動で金を稼いでいた点である。

(5) 確かに、Bululú、Ñaqueをはじめ、一座を組んで演劇活動を行っていた役者たちはいた。しかし、彼らの戯曲は残っていない。印刷にしてまで残す必要はないと当時の出

版業界は考えたのであろうか。それに反してロペ・デ・ルエダの戯曲は彼が亡くなった2年後、1567年には Joan de Timoneda (1518?-1583)によって出版されている。つまり、ロペ・デ・ルエダは戯曲を書き残し、一座の座長を務めた最初の職業演劇人であったという結論にいたる。

ところで、セルバンテスの証言により、彼の持ち役は道化であったことが分かっている。彼は黒人女、ヒモ、ウスノ口の召使、ピスカヤ人などを演じていたのだ。

2. 研究の目的

(1) しかし、具体的に彼の道化芸がどのような芸でもって人々を笑わせたのか、分からない。まずは16世紀スペイン演劇における道化芸の系譜を探る必要がある。具体的には Juan del Encina をはじめとするロペ・デ・ルエダ以前の作者たちがどのような手段で笑を取ろうとしているのか、戯曲分析をしていくことになる。

(2) ついで、ロペ・デ・ルエダは座長であったことに注目しよう。彼のすぐ後から活躍した Alonso de Cisneros(1540?-97)は、ロペ・デ・ルエダの一座で修業を積み、次いで一座を組んで活躍した人だが、持ち芸は道化であった。つまり1560年から70年代にかけて、スペインの芝居は道化役者が座長を務める、言い換えれば、道化芸が主流であったことが分かる。

(3) しかし、ロペ・デ・ベガ(1562~1635)が劇作家として活躍する時代になると、具体的には1585年以降だが、道化が主人公になる戯曲は書かれなくなり、17世紀の座組をみていくと、Baltasar de Pinedo(?-1610)や Jerónimo Velázquez(?-1613)など、座長を務めている役者は道化ではなく、立ち役の色男(galán)を務めている。つまり、戯曲の主人公を務める役者が座長になっている。(4) このことは道化芸で観客を笑わせるのではなく、筋の展開で観客を満足させる、つまりセリフ劇の成立を証明していることになるのだが、一座には必ず道化役者がいたわけで、例えば、ロペ・デ・ベガの『フエンテ・オベフーナ』(1610年頃)に登場するメンゴは演技で笑いを誘うわけではなく、小難しいセリフ回りで笑いを取っている。しかし、座長が務めた主役のフロンドソに次ぐ役柄が当てがわれている。一座に道化役者がいるがゆえに作られた登場人物と言えるだろう。

セルバンテスも1615年に『新作コメディア8編と幕間劇8編』を出しているが、どのコメディアを読んでも道化の役は軽くなっている。

(5) 次世代のカルデロン・デ・ラ・バルカ(1600~81)の『人生は夢』(1635)の道化役クラリンは登場人物に行動の指針を示すとともに、ダジャレを飛ばして見事に笑いを誘うが、端役の宿命なのだろうか、大団円の前に鉄砲の弾に当たってあっけなく死んでしまう。このように道化役の戯曲的役割の進

歩は見られるものの、体を張って笑いを取る道化芸は消えていったのだ。

(6) しかし、スペイン演劇が隆盛を迎える要因の一つはロペ・デ・ルエダの道化芸であったことは確かだ。ロペ・デ・ルエダの道化芸がどのようなものであったのか、分析し、検証する必要がある。これが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) ロペ・デ・ルエダが残した4編の戯曲と7編のパソと呼ばれる笑劇から、道化芸をパターン化すると、次のようなパターンが見られる。

- ・取り違え
- ・言い間違い
- ・チンプンカンプンな言葉づかい(でたらめなスペイン語)
- ・見栄っ張り
- ・誇大妄想
- ・空威張り
- ・臆病風
- ・ウスノコ
- ・立て板に水のような一方的なしゃべり方
- ・ドタバタの立ち回り
- ・派手な殴打

このような道化芸がセルバンテスの戯曲にどのように表れているのか、分析する。

(2) この道化芸が現代に継承されていることをモロッコのマラケシュの広場で繰り広げられる大道芸に求める。モロッコの人たちが笑うポイントとロペ・デ・ルエダの道化が求める笑いのネタとを比較検証する。

(3) ロペ・デ・ルエダおよびセルバンテスの戯曲を現代で上演するに際してどのような道化芸を舞台上で見せているのか、国立演劇記録センターの録画資料から分析する。

4. 研究成果

(1) セルバンテスの残した8編のコメディに登場する道化役は座長が演じるのではなく、舞台を茶化す端役になっている。つまり話を展開するほうに作劇術が置かれ、筋とは関係のないところで道化が観客を笑わすことはない。唯一の例外は、戯曲のタイトルにもなっている『ペドロ・デ・ウルデマラス』の主人公のペドロは、戯曲の締めくくりにセリフを言うことから座長であることは分かるが、頭の回転の速さを見せるものの、演技というより筋の展開に目配りをする役割を負っている。言い間違いや誇大妄想、臆病風といった演技は見られない。17世紀の初めには役者の世代交代があり、主役級の役者が演劇界の中心的役割を担っていたと想像できる。

(2) Entremés と称される幕間劇は、ジャンルのいえばロペ・デ・ルエダのパソの延長線上にある笑劇であるが、ロペ・デ・ベガが確立した当時の興行界では、第1幕と第2幕のあいだに挟まれた上演時間が20分もかからない笑劇である。この中には、でたらめなスペイン語、空威張り、立て板に水のような

なしゃべり方、一方的な罵り方の演技は見られるものの、演技から笑いを取るのではなく、セリフから笑いを取る演劇になっていることがわかる。つまり、道化芸は17世紀にはすでに継承されていなかったと言えるだろう。

(3) モロッコのマラケシュの大道芸では、1人でやっているものから2人、3人、5人でチームを組んでいるものが見つかった。アクロバット、手品、歌、楽器演奏、派手な殴り合い、女装、エロチックな動作など、言葉が分からなくても理解できる笑の演技があった。数を数えるにしても、アラビア語、英語、イタリア語、スペイン語、フランス語、日本語、中国語をごちゃまぜに言うので、これも理解できた。マラケシュの道化芸は健在であった。

(4) マドリードの国立演劇記録センターでは、14本の作品を収集することができたが、どの舞台を見ても、道化役者がいないため、ロペ・デ・ルエダの戯曲でもセルバンテスの戯曲でも、道化芸を舞台上に表現する作品は皆目見当たらなかった。唯一、バルセロナの劇団エルス・ジョグラルスがセルバンテスの『不思議な見世物』をやったが、道化をコンメディア・デラルテからアルレキーノを登場させたのは、逆にスペイン演劇における道化芸の断絶を感じさせた。

(5) 本研究で達成できなかったことは、Juan del Encina、Lucas Fernández、Gil Vicente、Bartolomé de Torres Naharro、Diego Sánchez de Badajoz など、ロペ・デ・ルエダ以前の作品から道化芸を抽出することであった。Pastor(牧童)と呼ばれる狂言回しが登場するのだが、セリフから笑いを感じることができなかった。また、別の笑いの演技かもしれない。今後の課題としておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

田尻陽一「笑の肉体化 - スペイン黄金世紀演劇の道化芸の系譜」日本演劇学会、2016年7月2日、大阪大学(大阪府豊中市)

〔図書〕(計 1 件)

田尻陽一監修、水声社、『セルバンテス戯曲集』2017年2月刊行予定

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田尻 陽一 (Tajiri, Yoichi)
関西外国語大学・外国語学部・名誉教授
研究者番号：30081095

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：